

■ 本文

夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、^{〔①〕} 四月十余日にもなりぬれば、木の下暗がりもてゆく。築地の上の草青やかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれと^{〔②〕} ながむるほどに、近き透垣のもとに人のけはひのすれば、誰ならむと思ふほどに、故宮に^{〔③〕} 候ひし小舎人童なりけり。

あはれにももののおぼゆるほどに来たれば、「^{〔④〕} などか久しう見えざりつる。遠ざかる昔の名残にも思ふを。」など^{〔⑤〕} 言はすれば、「そのことと候はでは、なれなれしきさまにやと、つつましく候ふうちに、日ごろは山寺にまかりありきてなむ。いと頼りなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御代はりにも^{〔⑥〕} 見たてまつらむとてなむ、帥宮に参りて候ふ。」と語る。

「いとよきことにこそ^{〔⑦〕} あなれ。その宮は、いとあてに、けけしうおはしますなるは。昔のやうにはえしもあらじ。」など言へば、「しかおはしませど、いとけ近うおはしまして、『常に参るや。』と問はせおはしまして、『参り侍り。』と申し候ひつれば、『これ持て参りて、いかが見給ふとて^{〔⑧〕} 奉らせよ。』とのたまはせつる。」とて、橘の花を取り出でたれば、「^{〔⑨〕} 昔の人の」と言はれて、「さらば参りなむ。いかが聞こえさすべき。」と言へば、言葉にて聞こえさせむもかたはらいたくて、「何かは。あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも。」と思ひて、

^{〔⑩〕} 薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたると

と聞こえさせたり。まだ端におはしましけるに、この童、隠れの方に気色ばみけるけはひを、御覧じつけて、「いかに。」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、
同じ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずや

■ 設問 (全21問)

1. 本文冒頭の「夢よりもはかなき世の中」とは、具体的にどのような事柄を指して言っているか。為尊親王との関係をふまえて説明しなさい。
2. 傍線部①「四月十余日にもなりぬれば」を現代語訳しなさい。また、「ぬれ」の文法的説明（活用形・基本形・意味）を答えなさい。
3. 「あはれ」という語は、この場面で繰り返し用いられ、作品全体の基調をなす重要語である。古文における「あはれ」の中心的な意味を説明し、本文中での使われ方とあわせて述べなさい。
4. 傍線部②「ながむる」について、次の各問いに答えなさい。
 - (1) ここでの意味として最も適切なものを答えなさい。
 - (2) 終止形と活用の種類を答えなさい。

5. 「故宮」「帥宮」とは、それぞれ実在の人物としては誰を指すか。漢字の名（親王名）で答えなさい。また、二人はどのような関係にあるか。
6. 傍線部③「候ひし」、傍線部⑥「見たてまつらむ」、傍線部⑧「奉らせよ」には、それぞれ敬語が用いられている。それぞれの敬語の種類（尊敬・謙譲・丁寧）と、誰から誰への敬意かを答えなさい。
7. 傍線部④「などか久しう見えざりつる」を現代語訳しなさい。あわせて、この発言は誰の言葉か、本文に即して答えなさい。
8. 傍線部④「などか……見えざりつる」について、この一文には係助詞による表現上の決まりが働いている。
 - (1) その決まりの名称を漢字で答えなさい。
 - (2) どの語を受けて、文末がどう変化しているかを説明しなさい。
9. 傍線部⑤「言はすれば」の「す」は何を表す助動詞か。文法的意味を答え、あわせて「言はす」の主語（動作の主体）を答えなさい。
10. 傍線部⑦「あなれ」は、もとは二語が音便を起こして一語のように続いた形である。
 - (1) もとの形（音便化する前の形）を答えなさい。
 - (2) この「なれ」（助動詞「なり」）は推定・伝聞のいずれの意味か、また、なぜそう判断できるかを簡潔に説明しなさい。
11. 傍線部⑨「昔の人の」は、ある古歌の一節を引いたものである。和泉式部はどのような古歌を念頭に置いてこの言葉を口にしたのか、その歌のおおよその内容（趣旨）を説明しなさい。
12. 傍線部⑨「昔の人の」の引用に関連して、橘の花は古来、何を思い起こさせるものとされてきたか。本文の文脈に即して答えなさい。
13. 「あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをも」という和泉式部の心内語から、彼女が帥宮に和歌を贈ることをどのように受け止めているかが読み取れる。その心情を説明しなさい。
14. 傍線部⑩の和歌「薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたると」について、次の各問いに答えなさい。
 - (1) この和歌を現代語訳しなさい。
 - (2) 「聞かばや」の「ばや」の文法的意味を答えなさい。
 - (3) 「同じ声やしたると」の「や」の用法を答えなさい。
 - (4) 和泉式部はこの歌で、帥宮の何を確かめたいと言っているのか。「同じ声」が指す内容を明らかにして説明しなさい。
15. 二首の和歌は、和泉式部・帥宮ともに「ほととぎす」を共通の素材として詠み交わしている。両者が「ほととぎす」に込めた意味の違いを、対比させて説明しなさい。
16. 帥宮の返歌「同じ枝に鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずや」について、次の各問いに答えなさい。
 - (1) この和歌を現代語訳しなさい。
 - (2) 「同じ枝に鳴きつつをりしほととぎす」とは、誰と誰をたとえたものか。
 - (3) 結句「知らずや」には、相手にどのような気持ちを伝える働きがあるか説明しなさい。
17. 傍線部がない次の語句の、本文中での意味を答えなさい。
 - (1) はかなき

- (2) あはれと（ながむる）
- (3) つつましう
- (4) けけしう（おはします）
- (5) かたはらいたく

18. 小舎人童は、もとは誰に仕えていた者で、現在は誰に仕えていると本文で語っているか。あわせて、童が和泉式部のもとを訪れた直接のきっかけを答えなさい。

19. 次の文学史の問いに答えなさい。

(1) 『和泉式部日記』が成立した時代区分を答えなさい。

(2) 作者と考えられている和泉式部は、同時代に活躍した女性歌人・作家である。彼女と同じ時代に宮廷で活躍した女性文学者を、作品名とともに一人挙げなさい。

(3) 『和泉式部日記』は、作者自身を三人称（「女」）で記す独特の書き方をとる。このような書き方をする点で、同じく和歌を中心に据えた平安期の物語風の作品を一つ挙げなさい。

20. 『和泉式部日記』は、日記文学の系譜に位置づけられる。次の各問いに答えなさい。

(1) 日記文学の先駆とされ、男性が女性に仮託して仮名で書いた紀貫之の作品名を答えなさい。

(2) 『和泉式部日記』の内容を一言で言い表すとすれば、何を中心に描いた日記といえるか。

21. 本文全体をふまえ、この冒頭の段が描こうとしている主題を、「悲しみ」と「出会い」という二つの言葉を用いて、八十字程度で説明しなさい。